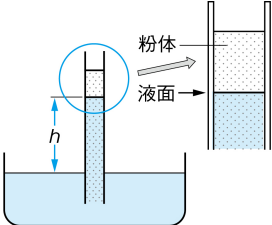
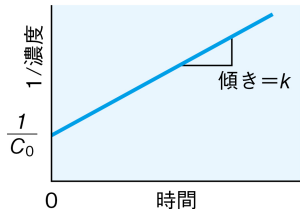
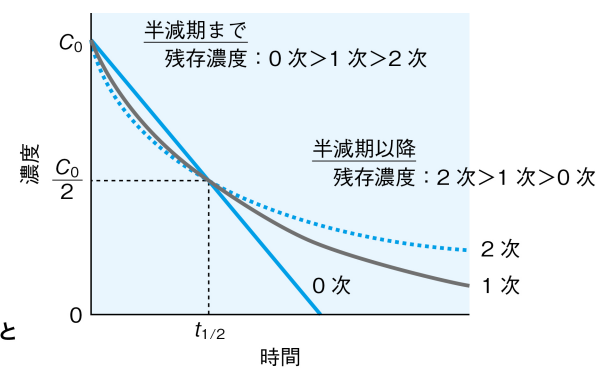


正 誤 表

「コンパス物理化学」(第2版第1・2刷)

下記の箇所に誤りがございました。謹んでお詫びし訂正いたします。

頁	行, 箇所	誤	正
1	↑ 1 行	$a, b, c$ ともに 1 以下の正の数	$a, b > 0, a \neq 1$ のとき, 任意の底 $c > 0, c \neq 1$ に
3	↓ 1 行	$= a^{\frac{3}{2}} \times a^{\frac{4}{5}} = a^{\frac{3}{2} + \frac{4}{5}} = a^{\frac{19}{10}}$	$= a^{\frac{1}{3}} \times a^{\frac{4}{5}} = a^{\frac{1}{3} + \frac{4}{5}} = a^{\frac{11}{15}}$
	↑ 6 行	$\frac{d \sin ax}{dx} = a \cos ax \quad \frac{d \cos ax}{dx} = -a \sin ax$	$\frac{d \sin ax}{dx} = a \cos ax \quad \frac{d \cos ax}{dx} = -a \sin ax$
4	* 1	Maclourin	Maclaurin
	式 (0・13)	$f(x) = f(a) + \frac{f'(x)}{1!}(x-a) + \frac{f''(x)}{2!}(x-a)^2 + \dots + \frac{f^{(n-1)}(x)}{(n-1)!}(x-a)^n + \dots$	$f(x) = f(a) + \frac{f'(a)}{1!}(x-a) + \frac{f''(a)}{2!}(x-a)^2 + \dots + \frac{f^n(a)}{n!}(x-a)^n + \dots$
	式 (0・14)	$\dots + \frac{f^{(n-1)}(0)}{(n-1)!} x^n + \dots$	$\dots + \frac{f^n(0)}{n!} x^n + \dots$
	↑ 8 行	座標の原点	$x = 0$ 付近
5	↓ 1 行	$\log(x+1)$	$\ln(x+1)$
6	↑ 8 行	A, B における	A, C における
10	表 0・3 ボーア半径の数値	$5.29177 \times 10^{11}$	$5.29177 \times 10^{-11}$
36	図 2・5	分子の回転エネルギー構造とマイクロ波吸収	分子の回転エネルギー構造 ( $E/h$ ) とマイクロ波吸収 単位は周波数.
	式 (2・3)	$E = BJ(J+1)$	$E = hBJ(J+1)$
108	↓ 4 行	③定圧可逆変化: $p_1 = p_2$ より $V_1 = V_2$ となり, (6・20) 式において	③定圧可逆変化: 定圧変化では $\Delta H = q_p$ であり, (6・7) 式は $\Delta S = q_p/T = \Delta H/T$ となる. この式に (5・13) 式を代入し,
140	↓ 1 行	表 8・1	表 8・2
161	↓ 10 行	書き換えることができる.	書き換えることができる. ここで, $T_{\text{fus}}$ は融点である.
164	問 2 グラフ		(縦軸下端に 0 を記入)
165	↑ 4 行	AB の	AD の
168	図 10・6	(下図に差し替え)	 <p style="text-align: center;">図 10・6 粉体のぬれ測定(浸透速度法)</p>
	↓ 4 行	毛管上昇法により測定することができる. 毛細管に	浸透速度法により測定することができる. カラムに
	↓ 6 行	測定することにより, ぬれ	測定することにより, 浸透速度やぬれ
	↓ 8 行	毛細管内側の半径 $r$	充填粉体の粒子が形成する毛細管半径を $r$
	↑ 7 行(2か所)	毛管	毛細管

頁	行, 箇所	誤	正
168	↑ 6 行	毛管の半径	毛細管の内半径
	↑ 4 行	毛管	毛細管
169	↓ 3 行	液滴を形成する.	液滴を形成する. 液体が管をぬらす場合,
	↓ 6 行	管の半径	管の外半径
	↓ 9 行	(図 10・8).	(図 10・8). なお, 液体と管の間にぬれが生じない場合, 液滴は管の外周ではなく内周に付着するため, $r$ は内半径を用いる.
177	↑ 4 行	距離の 6 乗に	距離に
188	表 11・1 ↑ 7 行	$\text{Cr}_2\text{O}_7$	$\text{Cr}_2\text{O}_7^{2-}$
201	↑ 4 行目	反応速度	残存濃度
	↑ 3 行目	2 次 > 1 次 > 0 次	0 次 > 1 次 > 2 次
	↑ 2 行目	0 次 > 1 次 > 2 次	2 次 > 1 次 > 0 次
	図 12・6	(下図に差し替え)	 <p style="text-align: center;">図 12・6 2 次反応における反応物濃度の逆数の経時変化</p>
	図 12・7	(下図に差し替え)	 <p style="text-align: center;">図 12・7 反応次数と残存濃度との関係</p>
203	表 12・2 2 次反応	$\ln t_{1/2} = \ln C_0 - \ln k$	$\ln t_{1/2} = - \ln C_0 - \ln k$
210	↑ 2 ~ 1 行	c は気体同士で起こる反応にみられ, 温度の上昇とともに反応速度が減少する.	(削除)
211	↓ 1 行	d は	c は
	本文最下行	(文章追加)	d は炭素の酸化や吸着現象を伴う反応にみられるパターンである. e は気体同士で起こる反応にみられ, 温度の上昇とともに反応速度が減少する.
238	問 5 ↓ 1 行	1500 cpm	1500 dpm
245	9 章 問 2	①室温における連結線より, A を多く含む相の A の組成は 27% (モル分率) である. ② 0°C における連結線より, A を多く含む相の A の組成は 10% (モル分率) である.	①室温における連結線より, A を多く含む相の B の組成が 27% (モル分率) だから, A の組成は 73% (モル分率) である. ② 0°C における連結線より, A を多く含む相の B の組成が 10% (モル分率) だから, A の組成は 90% (モル分率) である.

(榎南江堂 2019.1)